

# 青春スクロール

## 母校群像記

saitama@asahi.com

### スポーツの喜び・挫折 医療従事者への道

熊谷女子高校（以下、熊女）からは、熊女でスポーツに打ち込み、そこで味わった喜びや挫折をきっかけに医師や看護師など医療従事者への道を志した人がいる。

埼玉石心会病院（狭山市入間川2丁目）で内科専攻医として働く柴田夏実（28、2012年卒）は熊女時代、サッカー部で練習や試合に明け暮れた。初心者として入部したが、2年秋にはボランチとして試合に先発出場できるようになった。そんな9月。「今まで生きてきた中で一番痛かった」大けがに見舞われた。

ゴールも狙える位置で後ろからパスをもらい、振り向いてシュートしようとした瞬間、両側からストライディングされ左膝前十字靭帯断裂。「ぶちっ」という音は今でも覚えている。長い間悩んだ末、



柴田が在学していた頃の熊女には「文武両道」を地でいく友人が多く、「部活も勉強も」は苦にならなかった

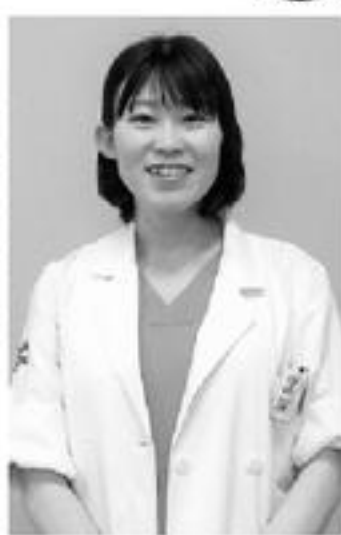
## 県立熊谷女子高校10



東日本大震災翌日の11年3月12日、鴻巣市内の病院で再建手術を受けた。入院は1カ月。リハビリ通院はその後半以上に及んだ。中学の職場体験で病院に興味を持ったが、患者として関わったのは初体験。「様々な職種の専門家が患者さんのためにチームで働く世界に魅せられました」という。

整形外科医の岡部文字（31、09年卒）は秩父市出身。中学までスピードスケートを続けてきたが、進学した熊女にはスケート部がなかった。そこで、スケートで鍛えた足腰を生かせるはずだと思っ陸上競技部に入った。

しかし、最初は15分のアップ（準備走）にもついて行けなかった。負けず嫌いな性格は、夏から朝5時に起床、30分から1時間走



岡部が熊女陸上部で猛練習に励んでいた2007年8月、熊谷市で74年ぶりの国内最高気温40・9度を観測

る朝練を日課にさせた。ようやく自信がつき始めた1年の年末、熊女は初めて全国高校駅伝（京都）に出場。都大路を疾走する先輩の雄姿に「私もここを走ってみせろ」という目標を抱く。

3年の夏、インドネシアで開かれたアジア・ジュニア陸上大会1万5千競歩に日本代表として出場してきた。結果が出ず落ち込んだときや体調が悪いときに寄り添ってくれたスポーツドクターに憧れた。「自分も選手に寄り添いたい」と医師を志したのは、この頃だ。

受験勉強も大変だったが、1年の時に抱いた目標を達成していい。「駅伝は今しかできない」と陸上部を続け、関東地区代表として、熊女として2回目の「都大路」出場権を獲得。年末にアンカーとして5区を走り切った。当時



野辺は乗り慣れたポーターから軽乗用車に乗り換え、訪問看護師として患者のもとに通っている

の岡部を支えたのは、陸上部顧問の「本気ならできないことはない」という言葉だった。

訪問看護師として熊谷市内の在宅患者を回って、今年で丸1年となった野辺香織（47、1993年卒）は、モーターポーター（MB）レーサーだった。中学生のころから将来の夢はMBレーサーだった。小柄な体格（身長152センチ）が有利になる、男女の差別もないと両親から勧められた。

その夢は誰にも言えなかった。「カミングアウト」は3年夏の進路相談。教室に担任の先生と2人だけ。「大学には行かず、MBレーサー養成所に入ります」。「えっ?」。驚いた先生の顔は今でも覚えている。直後に廊下で会った校長も「熊女始まって以来だ。でも夢を追うのは素晴らしいよ」と後押ししてくれた。

24年間、中堅プロレーサー人生を全うした。東日本大震災直後、選手会が何度か被災地でボランティアをした。でも、できたのは瓦礫撤去など肉体労働だけ。「困った人の力になりたい。レーサーで培った体調管理や精神力の鍛え方を伝えられるのでは」と考え、第二の人生に看護師を選んだ。30歳ほど年下の人たちとともに看護学校に学び、転身をかえした。敬称略